

榮光

神による装い

詩編 三九編 五〜八節
マタイによる福音書六章二七〜三〇節

739号

2021年11・12月
日本基督教団
田園調布教会
伝道部発行

〒145-0071
東京都大田区田園調布
3-34-18
電話 03-3721-2811
FAX 03-3721-2814
<http://den-church.jp/>

牧師 高橋 和人

思い悩むな

主イエスは御自分のもとに集まった人々に向けて「思い悩むな」と言われた。その声は沁みとおったことでしょう。わたしたちも同じように聞くことができます。しかしそう言われて、聞いていながらも、なお悩み続けているのではないのでしょうか。わたしたちには日々の生活で悩みが尽きることはないのです。悩みながら生きる。そちらの方がすつかり身に付いているのです。

生きることに悩みはつきものなのは、悩みの根源が自分の命にかかわることだからです。生きることは命を守ることです。努力し、勉強し、仕事をしなければならぬ、食べなければならぬ、暮さなければならぬ。それが保証されるためには健康が守られなければならぬ。いつまでも健康でいたいとなれば、何とか寿命を延ばそうとあくせくすることになります。長生きなどするものではないと言いながら、結局できることならずつと生

きたいと願うのと同じことです。しかしそれはできないことです。

小さな事さえ

ルカによる福音書には、同じような場面の主の説教に「こんなごく小さな事さえできないのに、なぜほかの事まで思い悩むのか」(二一・二六)という言葉が伝えられています。主イエスをご覧になるには、わたしたちには大問題の寿命について、ごく小さなことと言われているのである。

なぜなら、人は結局はかないからです。

命が少し伸びてもはかなさの先送りになるだけです。先程の詩編三九・五には「教えてください、主よ、わたしの行く末をわたしの生涯はどれ程のものか、いかにわたしがはかないものか、悟るように。御覧ください、与えられたこの生涯は僅か、手の幅ほどのもの。御前には、この人生も無に等しいのです。ああ、人は確かに立っているようでもすべて空しいもの。ああ、人はただ影のように移ろう

もの。ああ、人は空しくあくせくしだれの手に渡るとも知らずに積み上げる。主よ、それなら何に望みをかけたらよいのでしょうか。わたしはあなたを待ち望みます。」と神に教えるを乞うています。いかにかないかを知らなために、人は自分分が分らず傲慢になり、思い悩むのです。

ソロモンの装いよりも

主イエスはまず衣服のことを取り上げ、大変具体的に「野の花を見よ」と命じられます。そう言われて人々は自分たちの足元を見たことでしょうか。大勢の人が集まっていたことでしょうか。踏みつけられたものもあつたことでしょうか。そこには王の衣装の色の花があつたという人もいます。野の花の美しさは人の手が加えられず、何もしないのに美しいものです。主はそれをソロモンの装いに比べます。ソロモンはイスラエルの歴史上、最も知恵と富と力に優れた王とたたえられます。彼はその力を用いてイスラエルの最大版図を作つた人物です。力を尽くして生きた人物です。しかし、彼と彼の父ダビデの罪とは切り離せません。彼の母親は、父ダビデが部下から奪い、その部下を最前線に送つて殺させたのです。ソロモンは王家の権力闘争を生き残り王となつた人物です。聖書はそれを隠さずに書き残しています。

主イエスはソロモンの榮華がこの花の装いに及ばないという。それは結局、人の力によるか神の力によるかという事です。

人がいかに偉大に見えたとしても、人の力に生きようとすることには確かさは無いのです。むしろ、力を持つほど悩みは大きく深いと言わなければなりません。歴史に残された人の榮華もはかなさの跡を残すのみとなります。野の花は一層はかない存在です、乾燥地帯